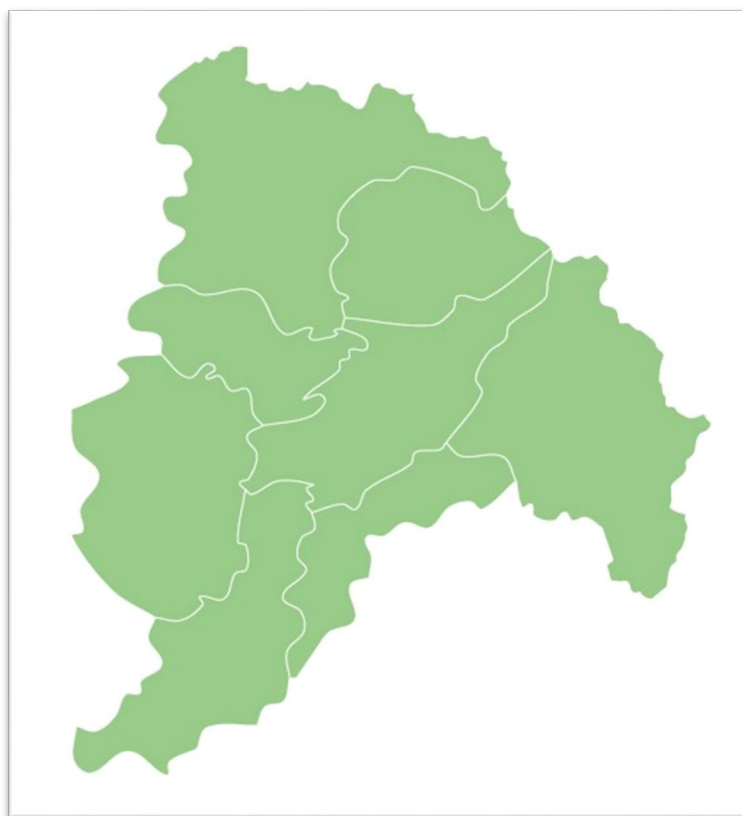


令和3年度
基盤共通教育集中講義



共生の森もがみ プログラム案内

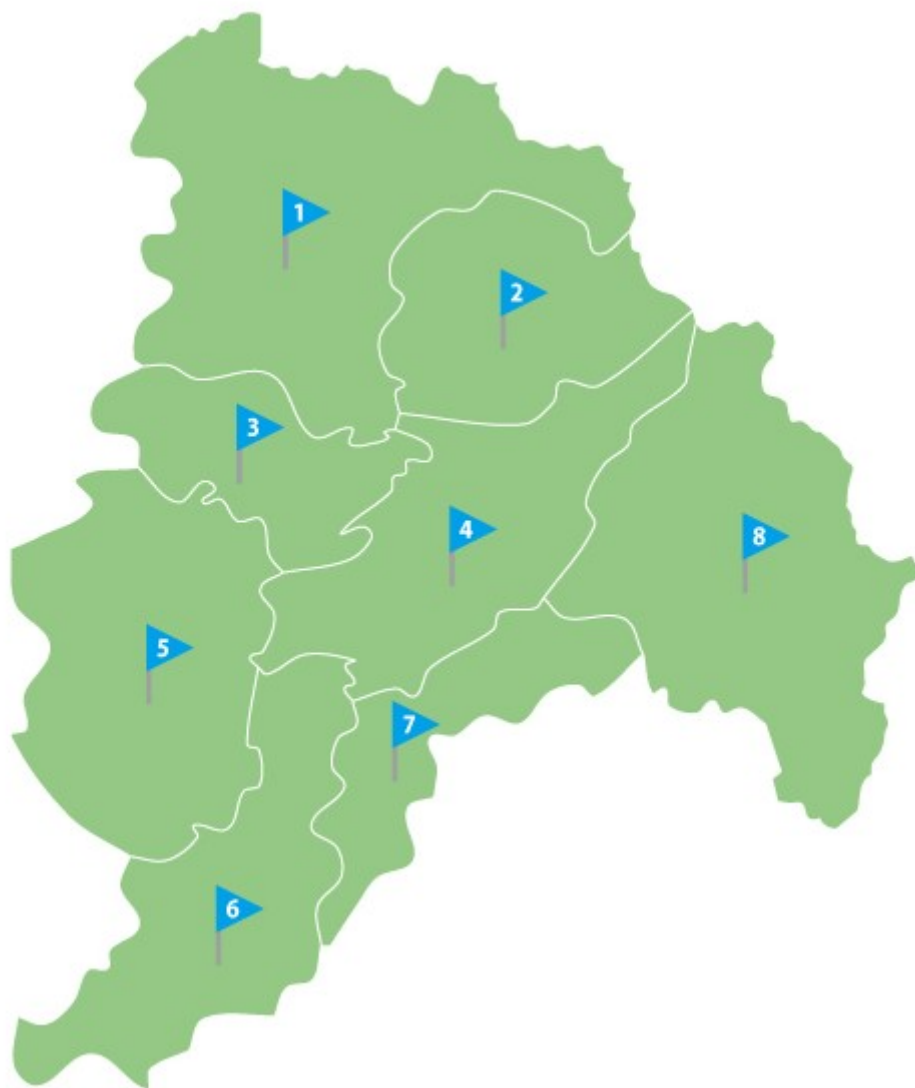


Q 最上広域圏8市町村の場所と名前を当ててみよう
→答えは表紙の裏へ！

エリアキャンパスもがみマスコット ヤム君



最上広域圏の場所と名前みんな覚えてね！！



1. 真室川町
2. 金山町
3. 鮭川村
4. 新庄市
5. 戸沢村
6. 大蔵村
7. 舟形町
8. 最上町

目 次

◇授業計画（シラバス）	2
-------------	---

◇前期

①新庄市	4
②金山町	5
③最上町	6
④舟形町	7
⑤真室川町	8
⑥大蔵村	9
⑦鮭川村	10
⑧戸沢村	11

授 業 計 画 (シ ラ バ ス)

■授業科目名： 前期・・・フィールドラーニング共生の森もがみ（山形から考える）

■担当教員：阿部宇洋、橋爪孝夫、菊田尚人 ■担当教員の所属：学士課程基盤共通教育機構、地域教育文化学部

■開講学年：1年、2年、3年、4年 ■開講時期：前期 ■単位数：2単位 ■開講形態：講義

～・・・授業概要～・・・

◎テーマ

自然豊かな山形県最上地域でのフィールドラーニングを通して、地域の文化や歴史、自然、環境等だけでなく、過疎化、少子高齢化等の現代日本が直面する諸問題を地域の人たちと共に学び、実践的な視点から知識を獲得し、山形から日本、世界及び過去から、現在、未来の空間及び時間軸で現象を把握する力を養う。

◎到達目標

①課題発見能力、課題探求能力、②プレゼンテーション能力、③コミュニケーション能力、④行動力、社会性の基礎的な力を身につけること。

◎キーワード

山形、エリアキャンパスもがみ、地域社会、プレゼンテーションスキル、学生主体型授業

～・・・授業計画～・・・

◎授業の方法

この授業は、各自が以下のプログラム（①～⑧）から1つを選択して受講する。受講の流れは以下のとおり。

- 1) オリエンテーション
- 2) 事前学習 (WebClass)
- 3) 【1泊2日フィールドラーニング (1回目)】
- 4) 中間学習 (WebClass)
- 5) 【1泊2日フィールドラーニング (2回目)】
- 6) 最終レポート (WebClass)
- 7) 活動報告会に向けた説明会・練習、活動報告ポスター作成
- 8) 活動報告会での発表

前期

	プログラムテーマ	開催地	1回目	2回目
①	地域×バーチャルワーキングスペースの未来構想	新庄市	6月12・13日	6月26・27日
②	かねやま旅情	金山町	5月15・16日	6月5・6日
③	最上町の人・自然・文化にふれよう	最上町	5月29・30日	6月26・27日
④	里地里山の再生 I	舟形町	5月22・23日	5月29・30日
⑤	子どもの自然体験支援講座	真室川町	6月12・13日	7月3・4日
⑥	大蔵村の生活と伝統の継承	大蔵村	5月29・30日	6月5・6日
⑦	人と地域をつなぐ環境保全活動	鮭川村	5月15・16日	6月19・20日
⑧	里山保全と角川のパワースポット巡り	戸沢村	5月22・23日	6月12・13日

～・・・授業計画～・・・

①説明会（各プログラムの紹介・プログラム選択希望調査）

4月8日（金）～4月14日（水）

WebClass で実施します

②抽選

4月15日（木）12：00

掲示板・WebClass で発表します

③履修登録

4月15日（木）～4月19日（月）17：00

学務情報システムで各自履修登録

④オリエンテーション（班顔合わせ、役割決め、フィールドラーニングの心構えについて）

4月30日（金）16：30～18：00

基盤1号館 112教室

⑥**活動報告会**

7月16日(金) 16:30～18:00

基盤1号館 112教室

学習の方法

◎受講のあり方

- (1) 安全第一を心がけ、積極的に活動に参加してください。
- (2) 専門分野の方法論や数値的なデータだけではなく、フィールドラーニング(あるく・みる・きく)で集めたデータをもとに考えるよう心がけてください。「現場で考える」「体で考える」(もちろん頭も使います)ことが合言葉!そして、自分の想像力を大事にしてください。

※学部の行事や、サークル活動(大会)と予定がバッティングしないように気をつけてください。必ず確認すること。

※メールでのお知らせや掲示板での情報がありますので、必ず確認してください。

◎授業時間外学習へのアドバイス

- (1) オリエンテーションで配布される「しおり」を熟読し、内容を理解して授業に臨んでください。
- (2) オリエンテーションでの詳細説明に基づき①事前学習、②中間学習、③最終レポートに取り組んでください。
また、フィールドラーニング中はこまめに記録ノートを作成するよう努めてください。
- (3) フィールドラーニング終了後、活動報告会に向けて準備を進めてください。方法については説明会を開催し、発表指導を2回行います。

成績の評価

◎基準

- (1) 地域での活動により課題を発見し、探求により深め、活動報告会の発表により他者に伝える事ができたかどうかを評価の基準とします。
- (2) 一連のグループ学習の中でコミュニケーション能力や主体的学習力、社会性などを発揮できる事を評価の基準とします。
- (3) 現地講師による活動評価、受講態度や、指示に対する達成度を数値化しそれを参考に教員が相対的に評価を実施します。

◎方法

前提として、現地活動にはすべて参加していること、また最終レポート提出が基本条件。

- フィールドラーニング活動への参加度40%
- 活動報告会での発表の完成度(ポスター含む)30%
- 現地講師による活動評価20%
- 受講生による相互評価10%

テキスト・参考書

参考書: オリエンテーションで配布する「しおり」を参照するほか、活動中に地域で配布される資料を活用してください。

その他

◎学生のみなさんへのメッセージ

フィールドラーニングとは、山形大学オリジナルの学術用語で、学部専門で学ぶであろう、フィールドワークの入門編として設計されました。フィールドワークでは全て、みずからの関心で調査する事に対して、フィールドラーニングとは、提示されたプログラムを通して、課題発見などを行なう教育プログラムになっています。

最上地域は、学生諸君を温かく迎え入れてくれるでしょう。是非、もがみを見て、聞いて、感じて(味わって)、「共生の森」のパワーを体全体で吸収してきてください。

この講義をきっかけに、多くの学生が最上地域での課外活動に参加してきました。教員を目指す学生や、地域でのボランティア、地域活動を体験したい学生にはお勧めです。

本授業は宿泊や実技体験を伴いますので、参加費が必要となります。(詳細は、プログラム説明会の際に説明します。)

◎オフィス・アワー

原則としてWebclassのメッセージで質問を受付けますが、オフィスアワーとして「阿部研究室」(基盤教育1号館2階東側)において、予約制で受け付けます。会議や出張等で不在にすることもあるため、確実に面談したい場合は事前にWebclassのメッセージで予約をお願いします。3人の教員が担当していますが、基本的には阿部へ連絡をください。

① 地域×バーチャル coworking スペースの未来構想



【目的・概要】

コロナ禍、新しい生活様式・新しい働き方改革は山形県にやってきました。山形市内と比べ、まだまだオンライン化が進まない最上地域にもそれは同じようにあてはまります。

そんな中で、昨年、新庄市・万場町商店街の中にある店舗『のくらし』内にバーチャル coworking スペースが設置されました。近未来的なバーチャル coworking スペースの活用アイデアを模索していきます！県内の様々な coworking スペースと同時接続して体験してみませんか？

授業の後半では、地域の特性とバーチャル coworking の特性を知り、一見遠そうな2つを掛け合わせた、新しい働き方・新しい学び方の方法を皆さんと考えていきたいと思います！（できれば実践も！）

【授業計画】

訪問1回目 令和3年6月12日、13日

- 1) のくらしを知る
のくらしの成り立ち説明
- 2) バーチャル coworking を知る
バーチャル coworking スペース体験
他の coworking スペースの方とオンライン上で交流
- 3) 商店街を知る
万場町商店街を歩き、何店舗かにお話し聞かせてもらう

訪問2回目 令和3年6月26日、27日

- 1) バーチャル coworking の可能性模索
商店街の特性、バーチャル coworking の特性、事例を調べる
- 2) 新たなバーチャル coworking を模索
のくらし coworking を起点としたバーチャル coworking の在り方・配信を構想する
- 3) まとめ

【講師】

一般社団法人 最上のくらし舎 吉野優美

【費用の目安】※変更がある可能性があります。

訪問1回目 2,000円程度＋食事代・交通費実費別途

訪問2回目 2,000円程度＋食事代・交通費実費別途

【受講定員】（最小開講人数）

6名（2名）

【令和元年度新庄市のプログラムを受講した学生の感想】

人文社会科学部 Aさん

私が今回のフィールドラウンジで最も印象に残ったことは、新庄出身の自分でも知らなかった、新庄まつりの魅力や課題を発見できたことだ。新庄まつりの歴史や戸沢藩主に関わる様々な場所を巡りながら、地元の人々の意見を直接聞くことができた。例えば、新庄まつりは、県内で一番歴史のあるまつりだということを知った。260年間一度も絶やさず、形態を変えず、人と人との繋がりを大事にしてきたまつりである。自分が一番考える人はなくて、いつも新庄市民みんなが支えあってきたそうだ。その話を聞いて、自分の故郷の人々の優しさにとっても感動したし、誇らしく思った。また、新庄まつりは260年以上前から続く、素晴らしい祭りだが、その伝統を引き継ぐ子供たちは年々減少している。後継者不足により、山車制作や囃子の組織は危機的状況にある。後継者不足に苦しむ町内の人々の話を直接聞き、自分が思っていたより課題は深刻で、解決するためには多くの時間と策が必要だと痛感した。

医学部 Sさん

はじめに、私がこのプログラムを選んだ理由は、山屋地区でのフィールドラウンジを通して山形について知り、また自分の地域の活性化につなげられることはないかを知りたいと思ったからだ。2回の活動を通して、私は自分の手で成し遂げることの喜びを感じた。初日には昔から見慣れているタケノコを収穫したが、実際はどのような場所に生えていてどのように収穫するのか全く知らず、新しい発見ばかりだった。また、2日目の草刈りも父が行っているのをよく見ていたこともあり自分にも簡単にできると思っていたが、実際にやってみると思っていたよりも力やコツがいり、なかなか思うようにできなかった。扉のペイント作業では、どのようなペイントにすれば山屋地区の人たちに喜んでもらえるか考え、自分たちだけでなく地域の方のアイデアも参考にしながら進めることができた。また、私は山屋地区のコミュニティの広さを感じることもできた。これは都会では感じにくい田舎の良さであると再認識することができた。

医学部 Sさん

私は、今までずっと山形県に住んでいながら新庄市を一度も訪れたことがなかったため、このプログラムをきっかけに新庄市に行ってみようと思い、このプログラムに参加した。フィールドラウンジの事前学習や実際の活動をしてみて、新庄市は地域を活性化するために Kitakita マルシェや100円商店街などの様々なイベントを企画、運営しており、私が想像していたよりも活気のある町だと感じた。また、イベントを運営している方や参加している方のお話の中で、人と人のつながりや協力し合うことを大切にしているのだと感じた。実際に今回のプログラムでグループメンバーや図書館の方と連携をとりながら企画を立案、運営していく中で、一人では実現が難しいことも人と協力し合うことで成し遂げられることがあるのだと学んだ。このプログラムを通して絵本の読み聞かせの重要性、子供との触れ合い方を実践し学ぶことができた。子供の前に絵本の読み聞かせをするのは初めてで緊張したが、子供が真面目に読み聞かせを聞いてくれたり、反応してくれた様子を見て、絵本の読み聞かせは子供と大人がつながる方法の一つであり、子供が人のぬくもりを感じる温かいものであると感じた。また、子供が本を読もうとする良いきっかけになると考えた。



【目的・概要】

○今回の金山旅の魅力を SNS で拡散してもらうこと。

○新たな町旅の提案をしてもらうこと。～泊まる・食べる・体験する・買う～（金山町の観光資源の PR と観光人口の増加につなげる役割を担ってもらう。）

【授業計画】

訪問1回目 令和3年5月15日、16日

講義：森の恵みを味わう講座

実習：そば打ち体験、スポーツ GOMI 拾い

観察：水辺の観察会

訪問2回目 令和3年6月5日、6日

講義：銀山歴史講座

実習：森の感謝祭2021、谷口銀山見学、ボランティア清掃
旅の提案

【講師】

遊学の森 三上重幸氏

谷口銀山保存会 井上敬助氏

【受講定員】（最小開講人数）

10名（5名）

【費用の目安】※変更がある可能性があります。

訪問1回目 5,000円程度＋夕食代実費別途

訪問2回目 5,000円程度＋夕食代実費別途

※このプログラムは初めて実施されるプログラムです。

【令和元年度金山町のプログラムを受講した学生の感想】

地域教育文化学部 Gさん

この2回のフィールドワークを通してこれまで全く知らなかった金山町で行われている活動や伝統、歴史など学ぶことができました。さらに地域の方々と話すことにより、課題も見つかりました。高齢化、若者の減少、山の手入れができていない、活動の広告があまり広がっていないことがあげられました。これらの課題を解決するためには何か必要であるかと考えたとき、私は今回のフィールドワークでさまざまな活動に参加し交流したことで課題を解決できれば良いと思いました。森と人との共存というテーマのフィールドワークで最初はよくわかりませんでしたが、帰るころには共存の意味が理解できるようになりました。貴重な体験の場を設けていただき、今回得たものを今後のフィールドワークやその他の活動に生かしていきたいと思っています。

地域教育文化学部 Eさん

私は、二回のフィールドワークを通して、多くのことを学びました。雪を家の中に貯蔵して、夏の暑さ対策に用いたり、野菜の保管に使ったりするなど発想に驚かされました。また、金山町は人が少なく、なかでも子供が少ないことが課題となっていますが、その分地域の人同士のかかわりが深く、祭りでも全員が知り合いのようなアットホームな雰囲気が見られ、羨ましく感じました。子供の数が減少したことで音楽に女子も加えたと言っていました。子供の数が増えたことでこのように問題を解決できれば良いと思いました。森と人との共存というテーマのフィールドワークで最初はよくわかりませんでしたが、帰るころには共存の意味が理解できるようになりました。貴重な体験の場を設けていただき、今回得たものを今後のフィールドワークやその他の活動に生かしていきたいと思っています。

工学部 Nさん

金山町に行ってみようと思ったことは、民家のデザインが同じであることだった。調べてみると、金山町は1985年から100年をかけて自然と調和した街を作ることを目指しており、条例で「金山型住宅」と呼ばれる名産の金山杉を用いた住宅の普及に努めていることが分かった。すべての住宅がそうになっているわけではないが、外観がそろった住宅の並びには感動した。そんな美しい金山町には、「谷口銀山」という銀山の廃鉱がある。廃鉱といっても荒れ果てているものではなく、保存会によってきちんと整備がなされており、坑道内にも入ることができる。地下のため気温の変動は少なく、常に18℃程度である。オレンジの電灯が坑道内を照らしているが、非常に暗く、天井も一部低くなっているため懐中電灯がないと探索しにくい。しかし、それがかえって独特の雰囲気を作り出し、不思議な感覚にとらわれ、知的好奇心を刺激する。この歴史的資源を活用すると現在以上に町が活性化するのはないだろうか。

③ 最上町の人・自然・文化にふれよう



【目的】

○最上町の大堀地区公民館で行われている「わんぱく教室」。その活動内容は、田植えやキノコの植菌など、地域の自然、人々に関わり合いながら活動をしている。それを山形大学学生にも感じながら交流し社会性や感受性を高める。
○地域の方々との活動を通して、最上町を知ってもらう。

【概要】

○1回目はキノコの植菌など、自然に触れ合い、子ども達とも協力し合いながら活動。林業体験を通し最上町の林業の現状を知ってもらう。
○2回目も子どもたちと協力し合いながら登山。最上町の山の魅力を知ってもらう。1日目は自分たちで作った炭でピザ作り。志茂の桶で最上町の歴史を知ってもらう。

【授業計画】

訪問1回目 令和3年5月29日、30日

- キノコの植菌
- 炭焼き体験
- 林業体験

訪問2回目 令和3年6月26日、27日

- ピザ作り
- 志茂の桶めぐり
- 登山

【講師】

NPO法人山と川の学校 理事長 伊豆倉 勝行

【受講定員】(最小開講人数)

10名(8名)

【費用の目安】※変更がある可能性があります。

訪問1回目 7,500円程度+交通費
訪問2回目 7,500円程度+交通費

【令和元年度受講生の感想】

人文社会科学部 Mさん

四日間という短い期間だったが、普段は体験できない360度自然に囲まれた環境でたくさんの体験をすることができた。私が特に印象に残っているのは、1回目の2日目のキノコ栽培と山菜取りである。私の地元は山形県なので山菜には詳しいと思っていたが、見たことや聞いたことがない山菜を知り、見分けをとることの難しさを体験した。自分達で山へ行き、山菜をとり、自然に囲まれて食事をするという一連の自給自足の体験をすることができ、最上町の良さを肌で感ずることができた。子ども達との田植えとトレッキングでの体験では、初めはなかなか話しかけることができず打ち解けるのに時間がかかった。しかし、自分から積極的にコミュニケーションをとるという目標を立て子ども達に接すると次第に打ち解けることができ、最後には子どものほうから話しかけてきてくれたので嬉しかった。活発に生き生きと活動する子ども達を見て、最上町は子育てをするうえでとても良い環境であり、最上町の宝物であると感じた。

理学部 Nさん

私が最上で最も印象に残っていることは子供たちの元気さである。私たちは訪問1回目と2回目の1日目で子供たちと触れ合う機会があった。はじめのうちは子供たちも私たちも探り探りの様子で、少し緊張していた。しかし、こちらから少し話かけると、徐々に子供たちも慣れ始め、気づいたら私たちの体力はすべて奪われていた。そこで私は高校生の時に体験した保育園での子供との触れ合いを思い出した。その保育園でも私は子供の持つエネルギーに圧倒されていた。この2つからわかることはどんな場所で生まれようが、どんな場所で育とうか子供は変わらず元気であるということ。どこの子供と遊んでも楽しいこと。やはり自分は子供と遊んだり、話したりすることが好きだということ。今回の最上の目的は子供と触れ合うことではないと思うが、自分の中で好きなことを再確認できたという点で、子供との触れ合いが印象に残っている。

医学部 Oさん

今回最上でのフィールドワークに参加して私が感じたことは、知らない土地や初めてのことをすることで得られる新鮮さと楽しさ。最上に来たことはなかったし、炭焼きやキノコの植菌など初めてのことは初めてとまどうこともあったが、現地の方々が優しく接してくれたおかげで様々な体験を楽しみながらすることができた。最上の森のメンバーとは今回の活動を通して知り合ったが、泊まりがけの講義であり様々な体験を共にしたこと仲を深めることができ、友人の輪を広めることができた。また2回目の活動では天候に恵まれはしなかったが子供たちとトレッキングを通してふれあうことができ、今まで子供たちと一緒になにかをするということがあまりなかったので元気の良さに驚いたがとても楽しかった。



【目的・概要】

農村が抱える過疎化対策を地域自らが主体となって取り組む地域活性化策を習得することを目的とする。

荒廃した農地等の再生を共に活動することによって、受講者自らが考案する農村の再生策を提言としてまとめることを目標とする。

○地域学講座（堀内地域の将来ビジョン）

○食と農の体験活動

【授業計画】

訪問 1 回目 令和3年5月22、23日

野菜の播種、定植活動

訪問 2 回目 令和3年5月29、30日

野菜の播種、定植活動

【講師】

堀内ファーム会員及び地域住民

【受講定員】（最小開講人数）

10名（3名）

【費用の目安】※変更がある可能性があります。

訪問1回目 6,000円程度（食事代含む）＋交通費

訪問2回目 6,000円程度（食事代含む）＋交通費

【令和元年度受講生の感想】

地域教育文化学部 Bさん

今回の農業活動を通して農作業の達成感と過酷さを痛感しました。加えて、高齢の方々がいつもこのような作業を少数で行っているということがどれだけ大変なのか考える良い機会になりました。私自身今回の体験はとても楽しく、以前より農業に興味をもてる体験でした。そこで、堀内地域の現状を維持するために、グリーンツーリズムの促進と農業体験活動の取り組みを積極的に行っていくこと、また、私たち自身も今回の活動を通して感じたことを周りに発信し、大切にしたいと考えています。それによって少しでも農業に興味を持つ人や堀内地域を訪れる人が増えたらと思います。特に子供に自然、食についての理解を深める活動を行うことによって就農したいと考える人が増えるのではないかと思います。

医学部 Oさん

私たちは4日間、きゅうり1020株、ナス、じゃがいも2400個、かぼちゃと南蛮の植え付けなどの農業体験を行いました。私が特に大変だと感じたのはハウスを建てる作業です。作物に直接関係するわけではないけれど、きちんと幅を測ったりきつく紐を締めたりしなければいけないので意外と集中力を使いました。私が野菜を買うとき、そんな裏の作業について考えたことはなかったので、今回炎天下の中自分でそれを体感して、農家の方々の努力は本当にすごいものなのだと感じました。しかしひとつの作業が終わってから全体を眺めると、今まで何もなかった畑に自分たちが一所懸命につくったハウスや、植え付けをした苗がずらりと並んでいて、とても達成感がありました。また共同作業の大切さも感じました。それぞれが仕事を自分で見つけて動くことで、ひとつの作業にかかる時間が少なくなっていく作業が前倒しになっていたり、1人では時間がかかる植え付けもみんなでやると早く終わったり、当たり前のことだけれど改めてすごいなと感じました。

工学部 Mさん

私は出身が農村地域で、実家が兼業農家なので、小さい頃はよく自給野菜の収穫や田植えをした。だから農業が大変なことは知っていた。しかし、今回、野菜の苗を植えるまでの色々な準備が想像以上に大変で驚いた。特に苗を植えるための穴を開け作業と、畝をならすのが力作業で大変だった。今回は13名で作業を行った。普段は3人で作業をされているそうである。13人でも大変だったのに、それを考えると、時間もかかるし、肉体的にも大変だろうと感じた。しかも、舟形町では農業をする世代の高齢化が進んでいる。力仕事が増えるのか、人手がある程度確保しないと厳しいこともあるだろうと思った。少しでも農業をする際の負担が和らぐ方法を見つけていかなければいけないと感じた。

⑤ 子どもの自然体験支援講座



【目的】

子どもの自然体験活動の支援に携わり、体験活動を通じた子どもの変容に気付くことで、自然体験活動の意義を感じたり、よりよい支援の在り方を考えたりする。

【概要】

1 回目は、1 日目に子どもたちが自然体験活動や共同生活体験を通して、学んだり、感性を育んだりしていくことをどう促していくかということを考える。2 日目に幼児～小学校 2 年生までを対象にした「めんごキャンプ」にスタッフとして参加し、日帰りの自然体験活動での子どもたちの学びの支援を体験する。2 回目は、1 回目の経験をもとにして、小学校 3・4 年生を対象としたキャンプ「わんぱく探検隊」にスタッフとして参加し、2 日間を通じた自然体験活動、共同生活、異年齢交流での子どもたちの学びの支援を体験する。1 回目、2 回目子どもたちへの支援を通して得た気づきをもとに、自然体験活動の意義やよりよい支援の在り方についての考えをまとめる。

【授業計画】

訪問 1 回目 令和3年6月12、13日

- ・オリエンテーション、ワークショップ
 - ①真室川町について
 - ②自然と学びのワークショップ
 - ③自然体験実習

企画事業「めんごキャンプ」活動支援

- ・幼児～小学 2 年生対象
- ・班付きスタッフ、バックアップスタッフ
- ・野遊び
- ・トレッキング など

【講師】

山形県神室少年自然の家職員

【受講定員】（最小開講人数）

14名（7名）

【費用の目安】

訪問1回目 5,000円程度＋交通費

訪問2回目 5,000円程度＋交通費

訪問 2 回目 令和3年7月3、4日

企画事業「わんぱく探検隊」活動支援

- ・小学 3・4 年生対象
- ・班付きスタッフ、バックアップスタッフ
- ・野遊び
- ・野外ピクニック泊
- ・フィールドラニングのふりかえりと共有

【昨年度受講生の感想】

地域教育文化学部 Mさん

私は今回のこの2回のプログラムを通じ、子供たちと同じぐらいの貴重な体験ができた。私は県外出身のため山形のことはほとんど知らなかったし行ったこともなかったため、事前の下調べなどをして郷土のことやその土地についても知れた。また、実際の体験の中でも普段関わることのない年齢の低い子供たちと密に接することが出来たことは教員志望である私にとって大変貴重なものになった。

この体験をただの活動として考えるのではなく、一つの地域的な営みとして捉え、地域全体で支援していこうという神室少年自然の家の職員の方々の思いをとて感じた。このような思いを形にしていけるためにも支援のあり方やより良い方法を模索していくことが重要であると考えた。

医学部 Sさん

私は、最初子供と触れ合っただけで単位もらえるなんて楽しそうだな～と思って選びました。しかし私は子供と触れ合うという貴重な経験を通して多くのことを学び、培うことができたこのプログラムを通して一人の人間として大きく成長できたと思います。

私は学生スタッフとしてサポートする立場、親のような立場、そして観察員としての立場を経験できたと思う。私は将来医師を志しており、その中で子供と触れ合うことは少なくない。さらに自分の子供を持つこともあるだろう。この活動で自身は子供との接し方や最近忘れていた大自然の素晴らしさ、そしてコミュニケーションの大切さを子供のリアクションや成長を通して学びました。これらをこれから自分の人生に活かしていきたいと思います。

工学部 Kさん

1 回目の活動は、小学校 3、4 年生と山登りやシュラフ、テント作り、ピザ作りなどの活動を行った。子供達に会って、自己紹介もままならないまま、戸惑いながらも山登りが始まった。子供達と大学生はもちろん、子供達同士も初対面であった。そのせいか、子供達と大学生は話そうとできるが、子供達同士の会話は見るのがあまり無かった。道中、静かになることもあった。この活動は、あくまでも子供達が主体である。その為、どこまで子供達にやらせ、どこから手伝うかという線引きが難しかった。テント作りはみんなで協力しないと立てることができない。しかし、子供達は自分のしたいことを始めるとそれに夢中になり班員と協力しなくなってしまうことがあった。この時、子供達を言い聞かせるのは苦労があった。



【目的・概要】

大蔵村の人々は、歴史・文化・産業といった地域の伝統を共有することによって共同体としての意識・誇りを持って暮らしてきた。近年、少子高齢化とともに世の中の多様化の波が大蔵村にも押し寄せ、働き方・生活様式・人との関わり方などが変化し、伝統を受け継ぎ共同体を維持していくために地域の人々は様々な取り組みを行っている。村の取り組みの工夫と苦悩、課題について、体験を通して学び考えることがこのプログラムの目的である。

具体的には、以下の取り組みを中心に学び考える。

- 棚田・食文化保存
- 若者グループの産業・地域活性化活動
- 田植え踊り保存活動
- 村の歴史と伝統文化の継承
- 肘折温泉の湯治文化

【授業計画】

訪問1回目 令和3年5月29日、30日

- ・村の歴史と文化を伝え残す活動
- ・肘折温泉湯治文化について
- ・棚田の保存活動
- ・田植え踊りの保存活動

訪問2回目 2020年6月6日、7日

- ・若者グループの産業・地域活性化
- ・食文化の保存活動
- ・田植え踊りの保存活動

【講師】

地域住民の方々

【受講定員】（最小開講人数）

10名（5名）

【費用の目安】※変更がある可能性があります。

訪問1日目 5,000円程度（食事代含む）
訪問2日目 5,000円程度（食事代含む）

【昨年度受講生の感想】

人文社会科学部 Sさん

4日間のフィールドラウンジで、私は多くのことを学ぶことができました。私たちが受け入れてくださった大蔵村の皆さんに感謝したいです。
私は、大蔵村の魅力として、都会にはないつながりを感じました。四ヶ村の棚田での田植えでは地域の方々から田植えをさせていただきました。皆さんが親しく話しながら田植えに参加しているのを見て、ここまで親しいコミュニティがあるのかと驚きました。また、合海田植え踊りを見学するときに、教育委員会の方が「次の家は〇〇さんの家だな」と、次に踊りを踊る家について確認しているときも、私にとっては驚きでしかありませんでした。役所の人、保存会の人、合海地区の皆さんが一体となって活動を行っているのだなと思いました。私が地域の魅力としてつながりを挙げたのは、私が住んでいるところと異なるところでも都会と言われる市だからです。そこでは多すぎる人口のため、ひととひとのつながりも希薄だし、コミュニティが伝わるようなところがあります。また、私は「村」と聞くと、自然が豊かということのほかには少子高齢化や後継者不足、過疎化といったマイナスのイメージが強かったのですが、コミュニティが強いからこそその強みを知ることができました。

人文社会科学部 Hさん

今回の大蔵村でのフィールドラウンジで、様々なことを体験させていただきました。そして大蔵村の生活や歴史にも触れることができました。4日間の活動を通して村の現状を知り、多くのことを考えるきっかけとなりました。
棚田での田植え体験や肘折温泉街散策、笹巻作り、村の歴史と文化についてのお話をその場所に行き回って聞いて、私が一番感じたことは、人々の温かさです。大蔵村を大切に思い、来る人を拒むことなく迎えてくれる、このような温かさに触れることができました。また、合海田植え踊り見学では、村の中でのつながりが強いことも感じました。一軒一軒を回って踊りを披露するということが、人々の関係性が良好でないとできないことです。そして近隣付き合いが希薄になっていると言われる現代で村全体が一体となっていてある行事を行うということは素晴らしいことだと思いました。

農学部 Nさん

田植え踊りは、この4日間で経験したことの中で一番伝統を感じました。田植え踊りをやっている人は若い人が多くて、後継者不足を感じませんでした。家を一軒一軒回って踊るというのは、村人同士が信頼しあっているといえないことだと思いました。他の村にはない伝統を大切にしていきたいです。
食、観光、伝統文化など、様々な面で魅力を感じることが多かったです。自分の地元には笹巻や山菜料理のような伝統食がなかったため、大蔵村に来て初めて食べました。大蔵村には小学校、中学校が1校ずつある中で、学校給食としてそれらの伝統食を提供すれば経済面で少しは潤って、さらに伝統が継承されていくと思いました。観光では肘折温泉が魅力的で、飲める温泉に入るのは初めてだったので新鮮でした。肘折温泉街をみんなで協力して作っていくために、旅館と売店を分けていることに感謝を受けました。

⑦ 人と地域をつなぐ環境保全活動



【目的・概要】

『地域の自然は地域で守る』をスローガンにしている『鮭川村自然保護委員会』の方々から、環境保護活動について教えてもらいます。絶滅危惧種などの希少な動植物が生息する里山で、保全活動を体験することにより、生物多様性と地域の関わりを学びます。

【授業計画】

訪問1回目 令和3年5月15日、16日

- ・ギフチョウ属生息環境調査（羽根沢地区京塚）
- ・自然環境調査（水棲昆虫）

【講師】

鮭川村自然保護委員会 会長 高橋 満 氏
NPO 法人ネイチャーアカデミーもかみ 代表理事 矢口 末吉 氏

【受講定員】（最小開講人数）

5名（5名）

訪問2回目 2020年6月20日、21日（予定）

- ・自然環境保全活動、自然環境調査（水棲昆虫）
- ・自然環境保全活動（湿原まつり）

【費用の目安】※変更がある可能性があります。

訪問1回目 7,000円程度＋交通費

訪問2回目 9,000円程度＋交通費

【昨年度受講生の感想】

人文社会科学部 Oさん

今回のフィールドラウンジでは最上地方の鮭川村のプログラムに参加した。事前学習として鮭川村の人口について調べた後に実際にフィールドラウンジに行った。事前学習をしたもののほとんど鮭川村については知らない状況で参加したため、実際に来てみて知らないことをたくさん知ることができた。具体的には、鮭川村はギフチョウとヒメギフチョウの混成地であるということ、ザゼンソウの仲間であるアオザゼンソウという希少性の高いザゼンソウがあることなどがわかった。新しい知識を身に付けた後で活動をする、実際に花を見つづけることができた。

さらに、鮭川村の米地区の湿原の環境保全活動を行った。先日の大雨の影響で散策用の木道が流されてしまったため、その修繕、また、湿原地帯を広くするために小川の水をせき止めるダムづくりをした。木道の修繕では湿原まで木道を運ぶ必要があり、みんなで協力して木道を運んだが学生の私たちでもとても大変だった。ダムづくりでも、水をせき止めるために木を運んだ。これも学生の私たちでもとても大変だった。全体を通して、大変な作業が多かったがその分達成感を感じられる活動であった。知らなかったことを知ることができ、鮭川村について興味を持つことができた。

地域教育文化学部 Oさん

二回目のフィールドラウンジは、神奈川大生との活動だった。一日目、午前中に環境保全活動で草運びとダム作りを行い、午後からは米湿原について、ギフチョウとヒメギフチョウなどのお話を伺った後、米湿原を今後どのように保全していくかなど、鮭川村の今後の課題と解決策について議論した。最初はみんな空想めだったが、「最初はどんなに思ったことやアイデアを出して、後からグループ分けするといふ。」という先生からの助言を皮切りに、たくさんの意見やアイデアが飛び交った。神奈川大生がいるからこそそのアイデアも出て、とても充実した良い議論になった。

計四日間のフィールドラウンジで、鮭川村の美しい自然のことや、それらを守っていくための環境保全活動について、実際に体験することで深く学ぶことができた。とても充実した活動を行うことができた。その中で見えてきた課題や、それに対する解決策を学生主体で活発に議論し合えたことはとても良かったと思う。また、班員同士とても仲良くなったことや、村の人々の温かさを感じることができたことなど、全ての活動や出来事を通して、このフィールドラウンジに参加して良かったと思う。

医学部 Aさん

一回目では、一日目の午前は開講式の後、鮭川の自然についての講話を聞いた。午後は、鮭川村の村内の保全箇所をまわって見学した。夕飯後は、ミーティングなどを行った。二日目は午前中に環境保全体験として木道となる木を運んだり、水をせき止めるダムを作ったりした。午後はまた保全体験をし、その後展望台へ行った。

二回目では、一日目の午前に環境保全体験をした。午後は保全体験の続きをしてから、公民館へ戻って米湿原についての講話を聞き、米湿原をどのようにアピールしていくかについて話し合いを行った。夕飯後はミーティングなどを行った。二日目は午前中に保全体験を行った。昼食後、大平山に登り、戻ってから話し合いと感想発表をして、閉講となった。

この4日間では、鮭川村の自然についてしっかり学ぶことができたのでよかったと思う。特にギフチョウやヒメギフチョウ、その他多くの絶滅危惧種が鮭川村にいることを学べた。また、活動の中で特に印象に残っているのは草や木の枝などで簡単なダムを作るなどして水をせき止めたことだ。少し時間がたってから見に行くと、水が溜まっており、湿原のような風景になってきたことに少し感動した。今回は班員全員が初対面だったが、一緒に活動していくうちに協力して保全活動や話し合いなどを行うことができたので、班員には感謝している。



【目的・概要】

戸沢村南部・角川地区は四方を山々に囲まれた典型的な農山村地域です。里山には多くの資源があります。この資源を有効に活かすことは、地域経済発展や里山保全に欠かせません。この里山をフィールドを使って「山菜採り」「杉林の間伐」などを行います。また、角川地区は月山（出羽三山）への登り口の一つになっています。江戸時代中期（最盛期）には3万人を超える人々の往来がありました。山岳信仰に関わる名勝が多く残されており、これを巡るトレッキング（所要時間5時間・休憩含む）を行います。（角川の大杉～今神温泉～御池～48宿坊跡～浄の滝）

【授業計画】

訪問1回目 令和3年5月22日、23日

- ・ソノ打ち体験
- ・山菜採り
- ・山菜料理づくり
- ・キノコの菌植え

訪問2回目 令和3年6月12日、13日

- ・杉林の間伐
- ・木工クラフト
- ・今神山トレッキング

【講師】

NPO 法人田舎体験塾つのかの里事務局員
及び地元インストラクター

【受講定員】（最小開講人数）

16名（10名）

【費用の目安】※変更がある可能性があります。

訪問1回目 10,000円程度（食事代含む）＋交通費
訪問2回目 10,000円程度（食事代含む）＋交通費

【昨年度受講生の感想】

人文社会科学部 Tさん

1回目はわらびやうと、2回目はみず、ふきのなどの山菜取りを行った。山菜取り自体はそう難しくないと思うが、異なる種類の山菜をとってしまわないようにするの注意すべき点だと思う。地元の方に山菜取りをツアー化してみたらどうだろうかという提案をしてみたが、安全面の確保が難しく実現は厳しいという返答があった。その背景には山菜をとれる方の高齢化が進み引率が難しいという面もあるため、若い人材確保も課題として挙げられると思う。

1回目の終わりには幻想の森に行った。一面の原生林は壮大で、どこか神秘的な雰囲気を感じさせた。看板があったり足元に木材のチップが敷き詰められていたり整備されていたと思う。森までの道路はマイクロバス程度の大きさの車しか通行できないため、そこを整備すれば観光客をさらに呼び込めるのではないかなと思った。しかし、道路拡張は自然破壊につながるし、観光地化しすぎるとマナーの悪い観光客による森の破壊などにより保存が難しくなるという問題もあるため、調整が課題になってくると思う。

2回目の2日目は浄の滝トレッキングに行った。滝までの道中は楽しかったが、自然の豊かさを肌で感じることができた。事前に調べてはいたが、実際に滝を目にするとその規模と水量に驚いた。とても魅力的であり、険しい道中を経てでも来る価値があると思った。しかし、そうはいっても道中は足場が不安定な場所が数多く存在し、私たちのような若者はまだしも高齢者や子供のトレッキングは相当危険が伴うのではないかと考えた。そのため、景観を損なわない程度に道を整備することが課題として挙げられると思う。個人的には、歓迎程度でいいので足場を確保することが必要だと思う。

工学部 Mさん

最後に私たちは浄の滝に行った。前日の雨により山道は滑りやすくなっていて、決して平坦な道ではなかったが、辛くて心が折れそうだった時に班員と声を掛け合い協力しながら浄の滝にたどり着いた。滝は今まで見た滝の中で一番綺麗で迫力があり、疲れた体も癒やされた。しかし、滝にたどり着くまでに一歩間違えれば崖の下というような危険な箇所がいくつかあった。そこで、道の安全面の確保と道中に、滝まであとどのくらいかかるかの目安や、危険箇所を観光客に教えるような看板を立てておくのが良いと考えた。だが、整備にお金がかかり、その分をどうやって還元できるのかを考えていきたい。戸沢村は本当に自然が豊かで心が和んだ。民泊は初体験だったが、美味しいうどんをたくさん出してくださったり、話しかけてくださったり、私たちに優しく受け入れてくださって嬉しかった。私は新住市出身だが、戸沢村のことはあまり知らなかった。同じ最上にもこんなにも良いところがあるのだと気づけて本当に良かった。また足を運んでみたいと思う。

人文社会科学部 Aさん

また、戸沢村の観光地である角川の大杉や御池を訪れた。角川の大杉は、実物を見ることで写真では感じることができないほど圧倒された。幹の周りは10人以上でやっと囲むことができるくらい大きさと、木が高すぎて写真に全体を写すことができなかった。御池は、たどり着くまでの道が本当に大変だった。私たちが訪問する前日の大雨の影響で、予定していた道を歩くことができなくなり、案外では行くことができないほどの道のりをかなりの時間をかけて歩いた。登りも下りも急でとても怖かったが、目的地に着いた時は達成感があり、目の前に広がる広大な御池とそれを取り囲む緑に感動した。こんなに状況が整っている時に来たのは初めてと現地の方が話してくださるくらい晴れていて、同時に希少な生き物を見ることができてよい経験になった。